

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 方言表現法の分布類型と分布形成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大西, 拓一郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002946">https://doi.org/10.15084/00002946</a>

# 方言表現法の分布類型と分布形成

大西拓一郎（研究開発部門第二領域）<sup>1</sup>

## 1. はじめに

分布の類型化を通して分布成立へのアプローチを試みる。ただし、すべての項目を対象とした類型化ができていないわけではない。現段階での報告と見通しを述べることにする。

## 2. 分布類型を求めることの目的

分布の類型を求めることには2つの目的がある。

(1) 類型を求めることで複雑なものを整理する。

(2) 整理した類型から分布形成の過程を求める。

分布という空間情報は複雑である。まずは、これを整理し、類型化する。類型が求められるならそこには類型を生じさせるメカニズムが存在するはずである。その分析は分布形成過程の解明につながる。

## 3. 表現法で実施することの意義

文法研究は、共通語を対象とした理論面での研究の進展が著しい。また、文献による研究も多くの蓄積がなされている。最近、方言間の対照を基盤にした変化モデルも構築されてきている。

表現法として GAJ が扱う対象もそれらと重複する分野が含まれている。文献での中央語史が解明されている場合は、中央での絶対年代との照合が可能である。また、変化モデルが提示されている場合は、相対的変化序列の目安となる。

以上のように、表現法を対象とする分布研究は、語彙項目に較べると、分布の解釈につきまとう恣意性を低くおさえられる点で、有利である。また、文献やモデルとの照合に矛盾が生じることがあれば、それ自体新たな研究対象となるだろう。

## 4. 表現法地図にも見られる基本的類型

方言の全国分布に関しては、従来からいくつかの類型が知られている。表現法項目でもこれらにあたるものが挙げられる。

### 4. 1 東西型

図1は、結果態アスペクトの地図である。「(花が) 散っている」結果の状態の表現を表示している。東日本のテイルに対し、西日本にはテオルが分布している。ここには、古典的な類型の東西対立が見られる。

### 4. 2 周圏型

図2は、「～しなければならぬ」にあたる義務表現の地図である。全体はかなり複雑であるが、特に「ならぬ」に相当する部分に注目するなら、いくつかの語形に隔たった地域どうしでの類似性が認められる。例えば、千葉と岡山にはそれぞれオエネー・オエンが分布する。また、秋田と長崎にデキネー・デキンが分布する。これらも古典的な類型の周圏型として扱えるだろう。

<sup>1</sup>連絡先) takoni@kokken. go. jp

# 散っている（結果態）：GAJ4-199

- | テイル
- テオル
- ♁ テアル
- △ テイタ
- ✎ テラ
- その他

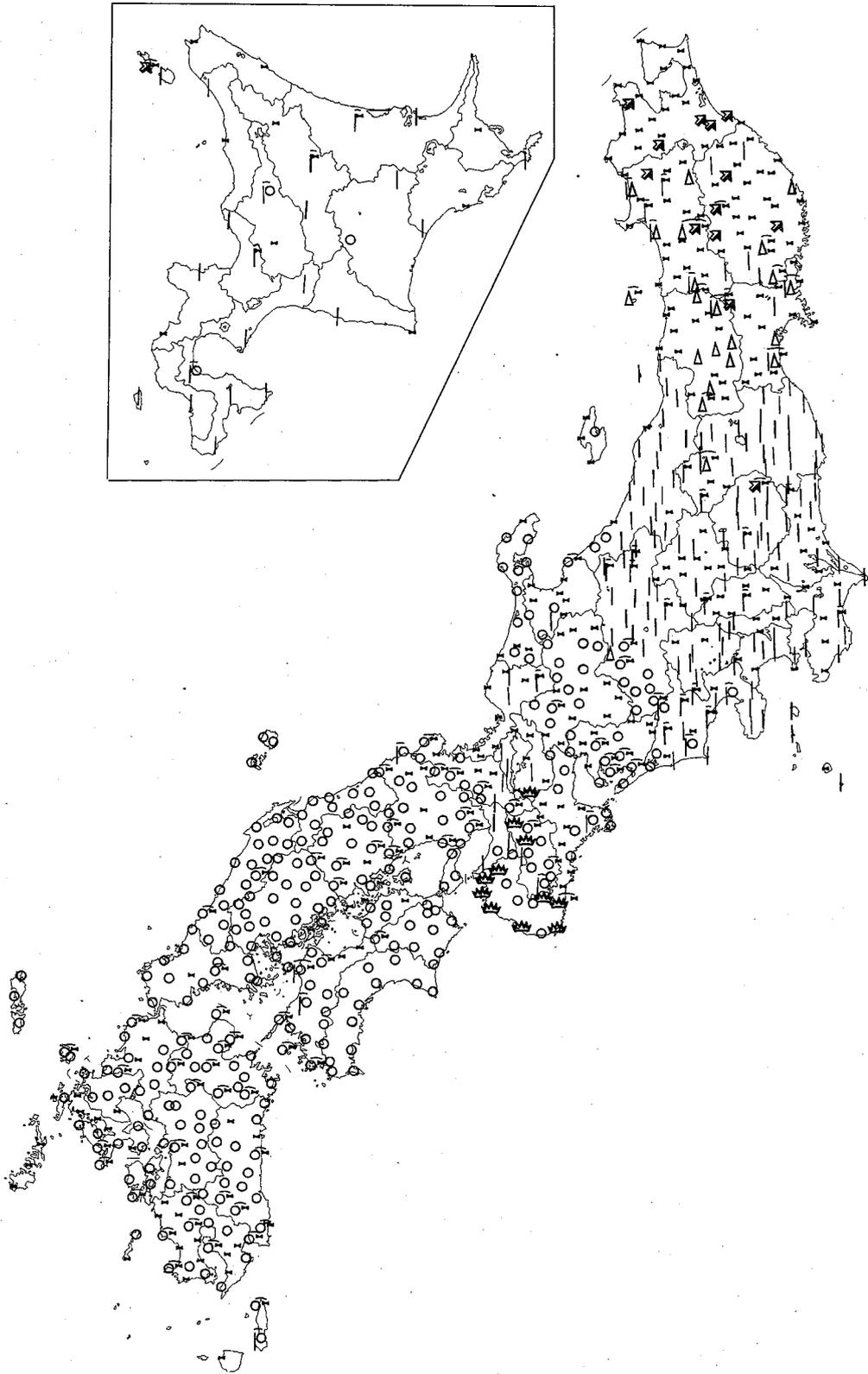
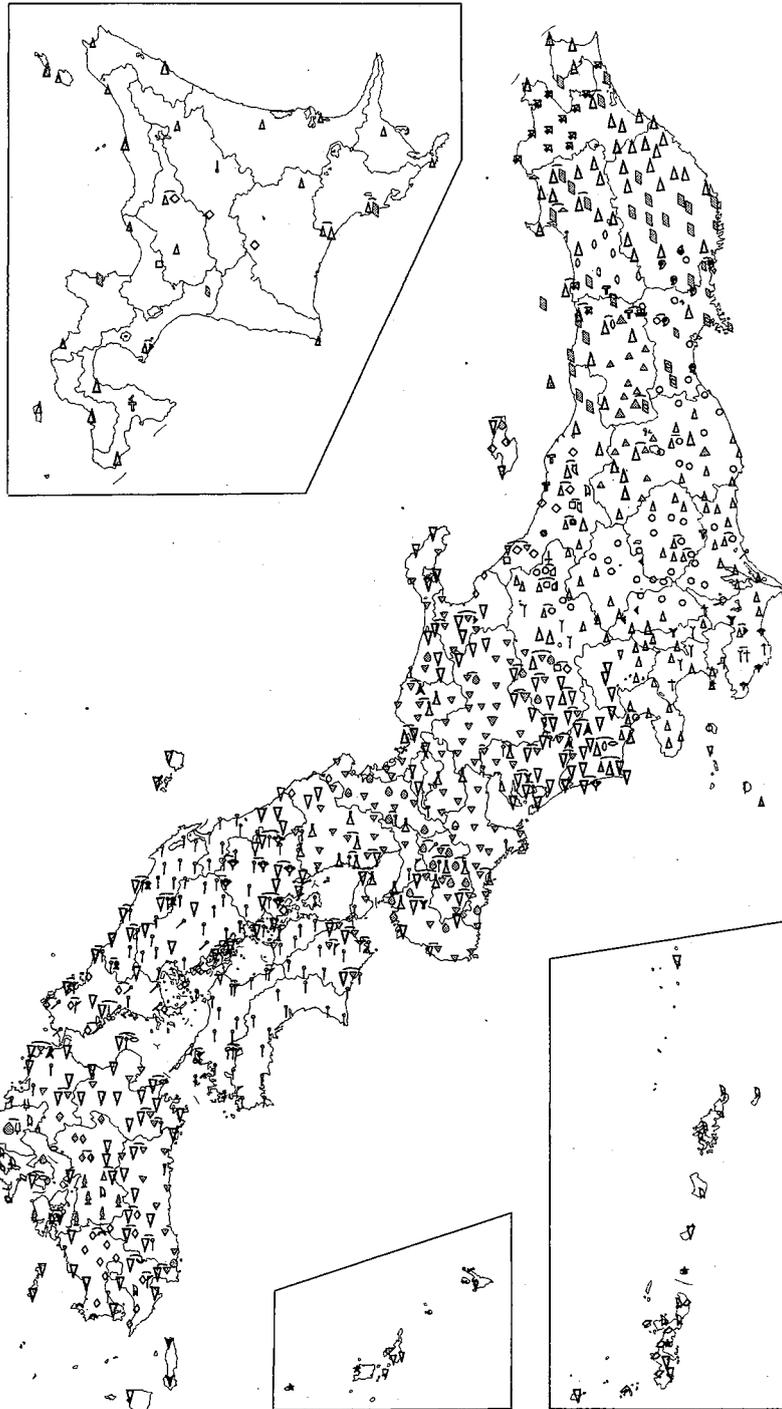


図1 (散っ) ている<結果態>

# (行か)なければならぬ:GAJ4-206

- △ -ナケレバ・ナケリヤー・ナキヤー+ナラナイ
- ▽ -ナケレバ・ナケリヤー・ナキヤー+ナラン
- ▲ -ネバ・ニヤー・ネー+ナラナイ
- ▽ -ニヤー・ネー・ナ+ナラン
- -ナクテ(ワ)・ナクチャー+ナラナイ
- -ンクチャー+ナラナイ
- -ンケリヤー・ンケバ・ンキヤ+ナラナイ
- ◇ -ンケリヤー・ンキヤ+ナラン
- ◊ -ンジャ+ナラナイ
- ◌ -ンダラー・ンダレー+ナラン
- ◌ -ンレー+ナラン
- ◌ -ンニヤー・ンナ+ナラン
- ◌ -ンバナラナイ
- ◌ -ンバナラン
- ◌ -ントナラン
- ◌ -ンダカー+ナラン
- ◌ -ンジャー+ナラン
- ◌ -ンナラナイ
- ◌ -ンナラン
- ◌ -ナラナイ
- ◌ -ナラン
- ◌ -ナナン
- ◌ -ンバナ
- ◌ -ンナン
- ◌ -ナキヤー+ナイ
- ◌ -ネバ+ナイ
- ◌ -ナクテ・ナクチャー+ナイ
- ◌ -ネー+ナイ
- ◌ -ニヤ
- ◌ -ナン
- ◌ -ンバン
- † -ナケレバ・ナケリヤー・ナキヤー+イケナイ
- † -ネバ+イケナイ
- † -ナクチャー+イケナイ
- † -ンジャ+イケナイ
- † -ナイト+イケン
- † -ント+イケナイ
- † -ニヤー・ナ+イケン, ニヤー・ナ+イカン
- † -ンケリヤー+イケン, ンキヤ+イカン
- † -ンニヤー+イケン, ンニヤー・ンナ+イカン
- † -ント+イケン・イカン
- † -ンダライ+イカン
- † -ジャー+イカン
- † -ンバイ+イカン
- † -ニヤー・ナ+アカン
- † -ント+アカン
- † -ネバ+ワカラネー
- † -ナクテ(ワ)ワカラネー
- † -ネバ・ニヤー・ナ+マエネ
- † -ナケリヤー・ナキヤー・ネバ+オエネー
- † -ニヤー+オエ
- † -ナス+マン
- † -ンニヤー・ンナ+スマン
- † -ネバ・ニヤー+デキネー
- † -ニヤー・ナ+デキン
- † -ジャー+デキン
- † -ンバ+デキン
- † -ネバ+ザネ
- † -ナケリヤー・ネバ・ナイト・ンケリヤー・ンバ+ダメダ
- † -ナケリヤー・ナキヤー・ニヤー・ナ+シヨ+ガナイ
- † -行キバドウナル・ヒドウナル



- ▷ -ナケレバ・ナキヤー
- † -ナクチャー
- ▲ -ニヤー・ナ
- ▽ -ンバ
- ✳ 行クヨーナ
- ✳ 行クランナイ

図2 (行か)なければならぬ<義務表現>

## 5. 古くない周圏型

前節で周圏型の分布として扱ったのは、中央からの放射の残存と見られるものであった。しかし、同じように周圏型を見せるからといって、すべてが同等に扱えるわけではない。かけはなれた地域であっても、それぞれで独立して同じような変化を起し、結果的に周圏的な分布を示すことがあるからだ。

図2は「(行か) なければならない」に相当する全国の語形を挙げるが、この中には語構成上、直接「なければ+ならない」には対応しない形が見られる。

例えば、近畿中央部と九州には(行か)ンナラン、東北には(行か)ンナラナイが見られるが、これらの地域では「(行か) なければ」をンで表すことは通常ない。近畿を中心に(行か)ンナンが見られ、熊本には(行か)ニャンが見られるが、これらも「(行か) なければ+ならない」に直接対応する形ではない。

これらの地域では、ンナランやンナラナイ、また、ンナン・ニャンが、いわば助動詞化しているものと考えられる。つまり共通語には存在しない「義務の助動詞」が発生している可能性が高い。これは、典型的な形式上の「文法化」である。

このような文法化を生じさせている地域は、東北・九州と隔たっており、ンナラン・ンナラナイのように、ほぼ同等の形を見せるが、中央からの放射の残存ではない。各地で独立して変化を起し、類似した結果にいたったものと考えられる。そのような変化は歴史的中央としての畿内でも発生したため、ンナラン・ンナラナイやンナンなど助動詞化地域の分布は、蛇の目(黒目)模様を示す。

活用においても類似の分布が認められた。例えば、形容詞で東北のタケカッタ(高かった)、九州のタコカッタ(高かった)、近畿のタカナル(高くなる)は、いずれも活用体系を整合化させるという点で変化の要因は共通する。これも各地での自然な変化に基づくという点で「なければならない」の助動詞化に通じる。そして、これらの分布領域は「なければならない」文法化の領域に類似する。

ここからわかることは、文法化や活用の整合化といった言語内の要因に基づく自然な言語変化を進行させる地域には、ある程度の共通性が認められそうだということである。すなわち、それは、東西の周辺部と中央である。これらは言語的には革新的な地域であるといえるだろう。

一方、それらに挟まれた地域、ことに中国・四国・九州中北部などは、中央から放射された古い形を残存させる傾向がある。いわば、保守的な地域である。以下ではこの点をめぐって考察する。

## 6. 複雑な分布を示す西日本

GAJを編集していて気が付くのは、東日本にくらべて西日本に多様な語形変種が現れるケースが多いことである。

図3は、進行態アスペクトの地図である。「(花が) 散っている」進行途中の状態の表現を表示している。東日本はテイル、テイタまたそれらの変種と考えられるテラが見られる。それに対して、西日本にはテオル・オル・アル・テイルが見られ、東日本より種類が豊富である。

西日本でとりわけ注目されるのは、進行態オル/結果態テオルにより2種類の基本的アスペクトの枠が区別される地域である。これは、図1と図3を照合することで把握される(日高,2002)。中国・四国・九州中北部がそれらに相当する。この区別は中央では上代から室町中期まで存在していたことが知られており(井上,1998: pp.15-17)、その放射的残存と見られる。

# 散っている（進行態）GAJ4-198

- | テイル
- テオル
- ㇿ テアル
  
- ┘ イル
- オル
- ㇿ アル
  
- △ テイタ
- ㇿ テラ
  
- ▲ イタ
- その他

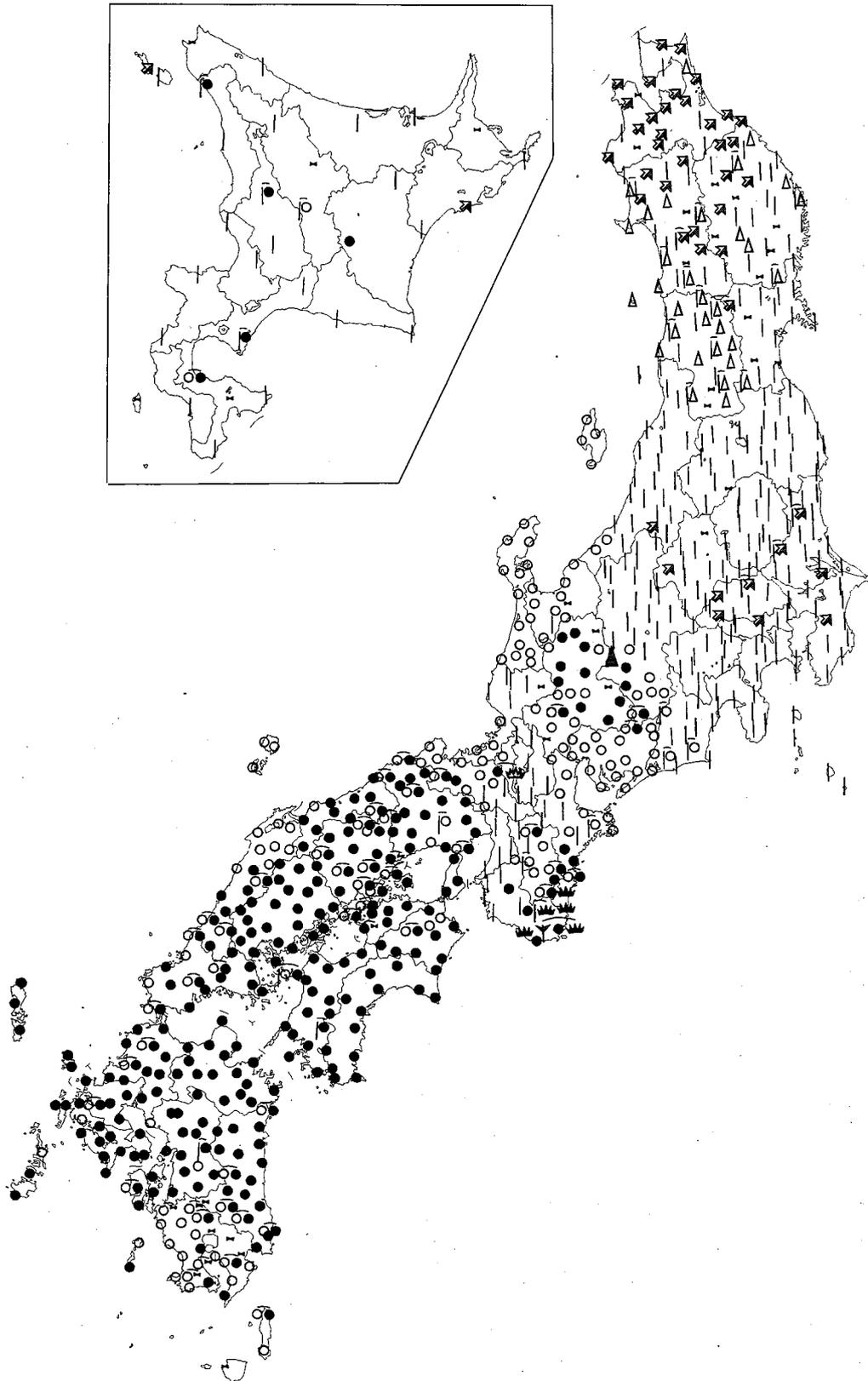


図3 (散っ) ている<進行態>

## 7. もうひとつの東西型

アスペクトに関して言えば、結果態だけ見るなら、分布類型は、東西対立を示す東西型であったが、進行態も併せて見ることで、単純な東西型ではないことがわかった。このように、東日本が比較的簡潔で、西日本が複雑な分布を示すことがある。東と西で分布相に異なりがあることから、東西型ではあるが、単純な東西型ではない。ここでは従来から広く知られる単純な東西型を東西 A 型と呼び、東簡潔／西複雑という類型を東西 B 型と呼ぶことで、区別する。

図 4 の「(行か) なかった」は否定過去の分布を表す。東日本に広く (行か) ナカッタが見られるのに対し、西日本は (行か) ナンダ・(行か) ザッタ・(行か) シナッタ・(行か) シカッタなど多様な形が見られることから東西 B 型である。

文献国語史によれば、ナンダは、中世後期(15世紀末)に中央で発生したもので、400年近く標準形であったことが知られている。ザッタはナンダとほぼ同時期に発生し、中央の文献にも少数ながら現れるが、ナンダほどの勢力を持つには至らなかったものである。なお、ナンダの語源については、定説がないが、「ぬ+あった」であるとするなら、鹿児島に見られるシナッタはそれにあたる可能性が高い(大西, 1999)。また、近畿中央部ではナンダは次第に勢力を失い、シカッタに交替しつつあることが知られている(真田, 1992)。

## 8. 東西 B 型の分布形成

それでは東西 B 型はどのようにして成立したのであろうか。

まずは、東日本には目をつぶり、西日本を中心に考えてみよう。

否定過去の「なかった」であれば、ザッタ・ナンダの順で中央の畿内から放射されたと考えることでおおよその説明ができる。シジャッタの類は、シカッタ同様に特殊単音節化を起こしてしまった否定辞に活用形式を与えるため、内的変化の中で自然発生したものであろう。鹿児島のシナッタは、ナンダの分節的起源形式(「ぬ+あった」に相当)と考えると、分布上の位置づけが理解される。

アスペクトに関しては、進行態／結果態が、オル／テオルで区別されるのが、中央畿内から古く放射されたものを反映する地域である。その後、中央畿内ではテオル／テオルに変化した。この変化は周辺部(九州南部)でも自然発生した。さらに中央畿内ではオルに待遇化がからんでしまったために待遇的にニュートラルなイルを用いたテイル／テイルに移行したが、アルを導入することでテイル／テアルに至り、再び進行態／結果態が区別されるに至ったと考えられる。

このようにおおまかではあるが、西日本に関しては、中央からの放射(外的影響)と各地の独自変化(内的変化)で説明がつく。残るは、東日本である。

東日本の形成に関しては、いくつかの仮説が立てられる。

第 1 は、西日本の分布、特に放射による分布が、東日本では堰き止められたという説である。

第 2 は、西日本の分布形態の連続が東日本にも存在したが、東日本では別系統の分布が塗り重ねられたという説である。そのほか、東西の拮抗なども考えられる(小林, 1991)。

この問題は、東西対立の成立に関わる。ただし、東西対立成立については、いまだ定説はない(彦坂, 2002)。第 1 の仮説を採用するなら東西 B 型の成立は次のように図式化される。

	西日本	東日本
否定過去	中央からの放射 (ザッタ→ナンダ) + 自然発生 (シカッタ, シジャッタ)	ナカッタ
アスペクト (進行／結果)	中央からの放射 (オル／テオル→テオル／テオル→テイル／テイル→テイル／テアル)	テイル／テイル

(行か) なかった:GAJ4-151

- ナカッタ類  
 | -ナカッタ  
 / -ネカッタ
- ナダ類  
 ■ -ナダ  
 # -ヘナダ  
 ▨ -ナド・ナズ
- ンカッタ類  
 ■ -ンカッタ  
 ▣ -ヘンカッタ
- ザッタ類  
 ● -ザッタ  
 ○ -ジャッタ  
 ○ -ヤッタ  
 ○ -ダッタ  
 ⊙ -ハッタ・ーッタ
- ンジャッタ類  
 ○ -ンジャッタ  
 ○ -ンダッタ  
 ● -ンヤッタ  
 ⊙ -ヒンヤッタ
- ナクテアッタ類  
 ◆ -ナクテアッタ・ナフテ  
 アッタ  
 T -ネデアッタ
- ナイツケ類  
 ^ -ナイツケ・ニヤーツキ  
 ^ -ノーツケ  
 v -ンケ
- ンダ類  
 ▸ -ンダ・ンタ  
 † -ヘンダ・ヘンタ
- ◆ -ンナッタ・ンニヤッタ  
 .ンナタン  
 ◇ -ナッタ・ナーッタ・ナ  
 ータ・ネーッタ・ナー  
 タン
- ★ -ネスタ・ネフタ・ナフ  
 タ・ナシタ
- ∪ -ネーデシマッタ  
 ∪ -ネンチャッタ・ネツチ  
 ヤッタ
- ⊠ 行キッコナシチャッタ
- ⊡ 行キンジャララ
- -ダタン・ツタン・ター  
 タム・ダティ・ラティ  
 ・ダナアタン
- ▷ -ンタン・ンタリ・ンテ  
 イ・ヌンタン

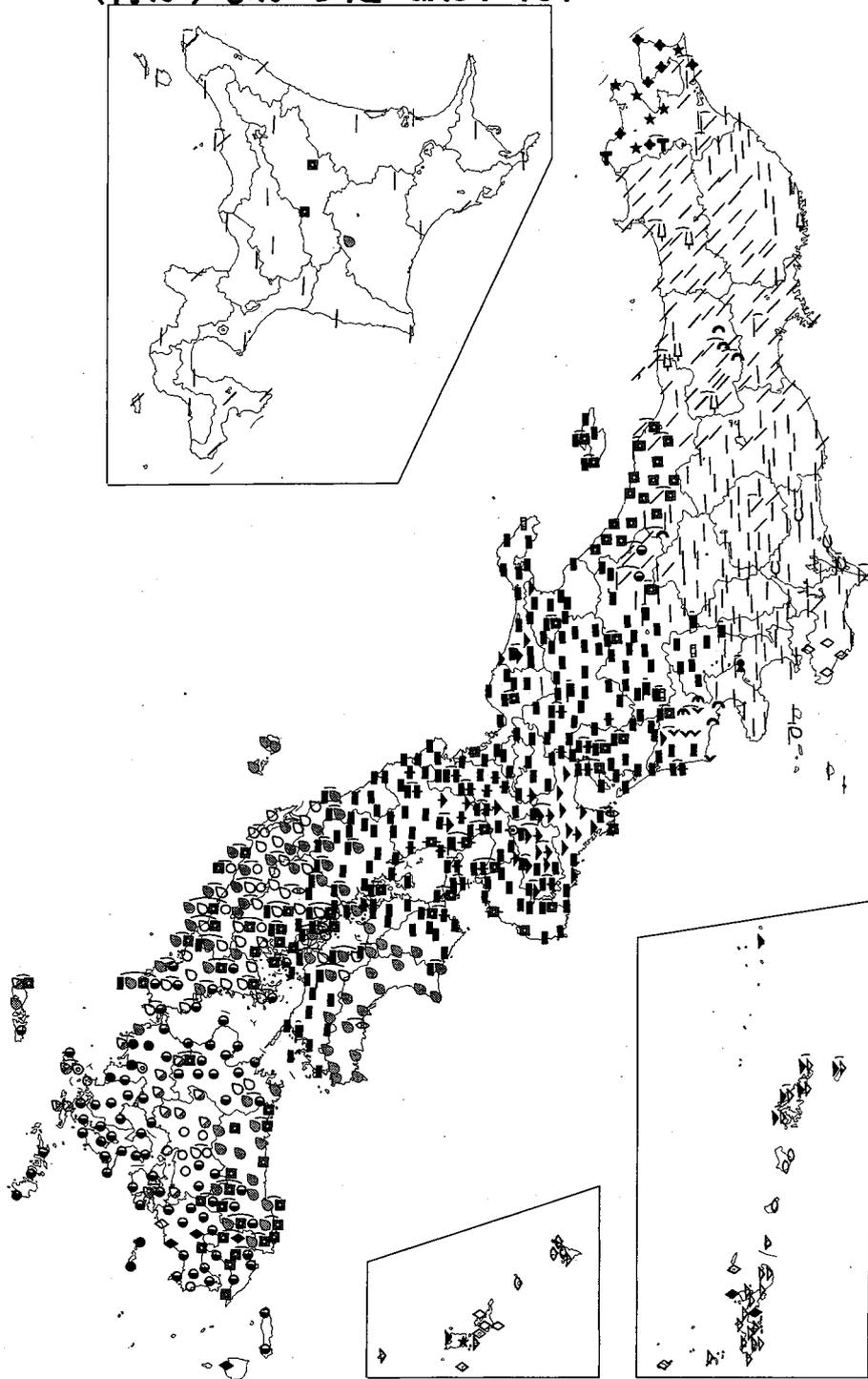


図4 (行か) なかった<否定過去>

## 9. 東西 B 型の意義

前節で挙げた第 1 の仮説、すなわち、西日本の中央からの放射が東日本では受け入れられなかったという説は、東西対立は、社会的に根深い対立であること、さらに言えば、歴史的にも相当に古くから存在していて、「基層言語」に近い、まさしく「対立」であったことを示唆する（馬瀬, 1992 : pp.351-412）。

この説に立つなら、単純な対立である東西 A 型と違い、東西 B 型は、重要な位置をしめる。それは、東西対立形成時期の指標となりえるからである。

東西 B 型においては、東日本には大きな変異がないことから変化を探る指標に欠ける。この点は東西 A 型の東西双方にもあてはまる。一方、東西 B 型の西日本には相当数の語形が存在し、このことが歴史推定の手がかりとなる。つまり、前節で行ったように東日本に目をつぶることで、西日本を中心とした歴史が描けるということである。

ここから得られる歴史的な最古層は、その放射時点で東西対立が成立していたと想定するわけだから、項目を積み上げれば、東西対立成立の年代推定につながる。東日本にマスクをして推定する方法であることから「E(=east)マスク法」と呼ぶことにする。図式化すると図 5 のように示すことができる。

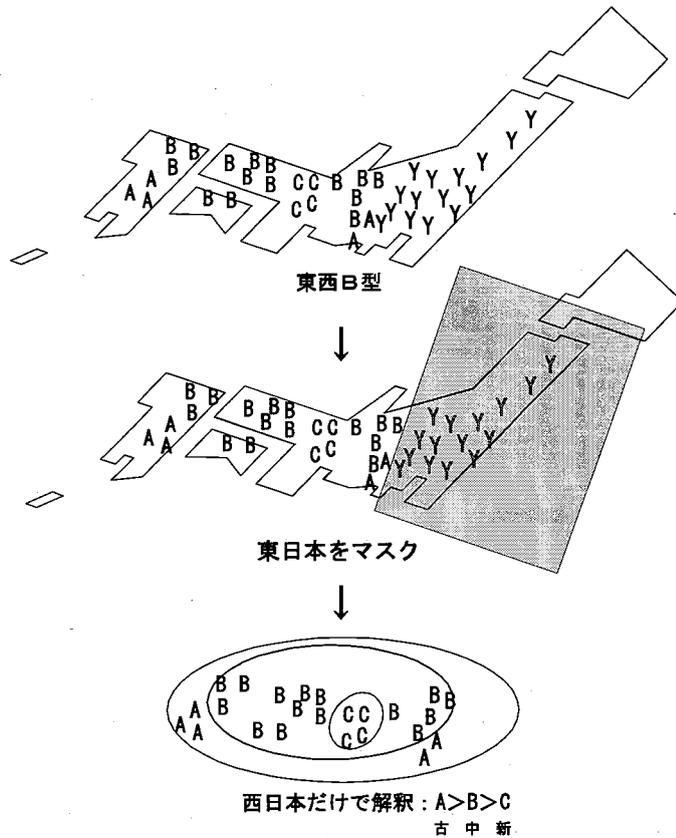


図 5 E マスク法

図 5 は、古典的手法である周圏分布に基づく解釈で例示したが、それ以外の手法による方法も考えられる。

例えば、アスペクトにおいては、用法の適用範囲に語彙的拡散 (lexical diffusion) の存在することが知られている。その背景には、語ごとの持つ文法的性質が効くことが理論化されている（工藤, 2002）。

これは GAJ でも確認できる。図 6 は、ともに将然態 (～しようとしている) という点で共通するが、明らかに広がり異なる。すなわち、「散る」より「死ぬ」の方がオル形による将然用法が広く確認される。工藤 (2002) では、「散る」「死ぬ」ともに主体変化動詞であるが、位置変化 (「散る」) であるか、状態変化 (「死ぬ」) であるかに違いがあるとされる。この文法的特性の違いが、オル形の文法化 (この場合は、「おる」が「存在する」と

いう語彙的機能から「アスペクト」という文法的機能を獲得すること) の進行をずらし、図 6 (「散る」と「死ぬ」) のような分布の違いとして現れるものと考えられる。

以上のように考えるなら、各種文法特性を有する語彙グループの分布を探ることでオル/テオル系の成立状況や時期が探れるのではないかと期待される。ただし後者の「時期」計測にあたっては、さらに乗り越えるべき壁が存在する。

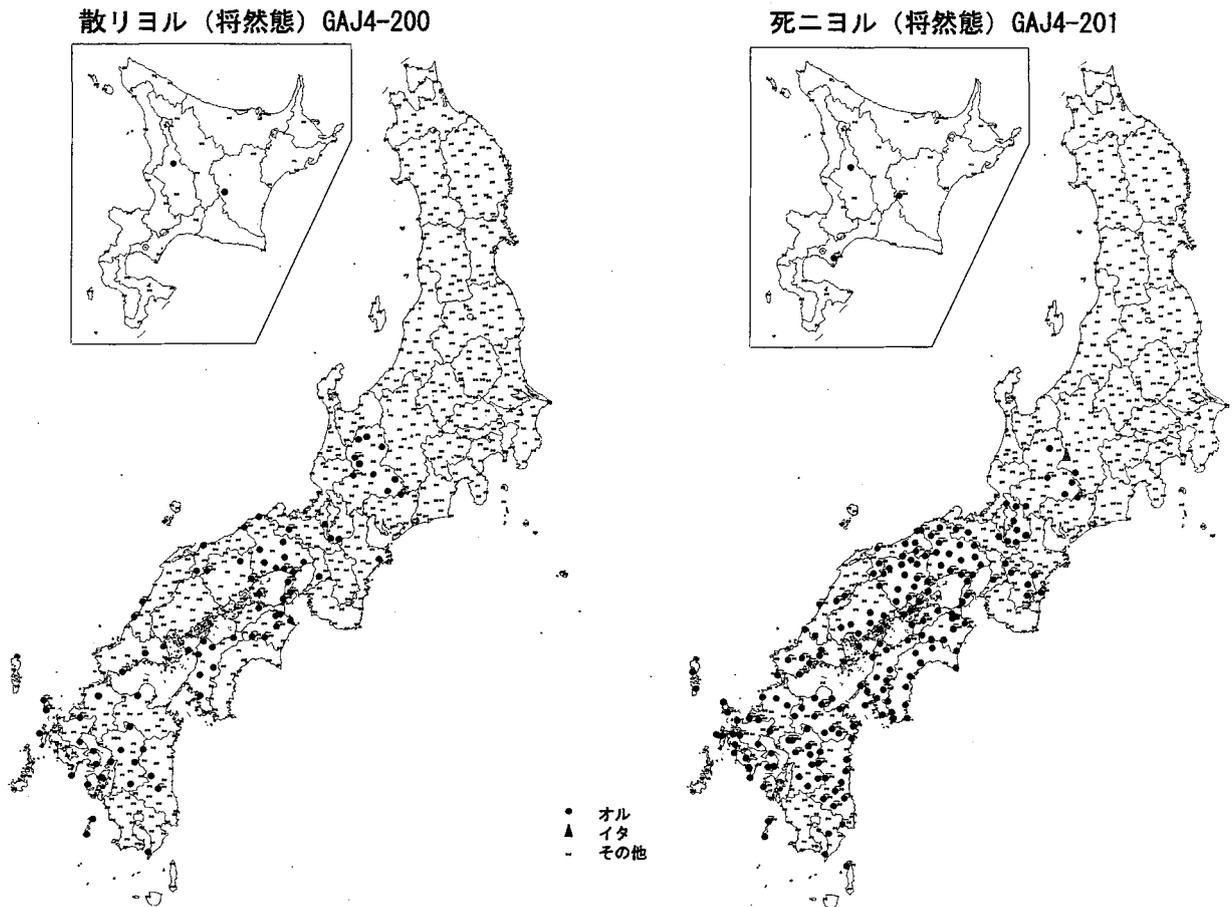


図6 「散る」「死ぬ」<将然態>

## 10. 課題

以上のように、表現法項目の分布データと文法理論や文献データを照合することで分布成立時期にアプローチできる可能性を述べた。ただし、E マスク法を含め、まだ解決が必要な課題がいくつも残されている。

そのひとつは、分布類型の認定である。各分布図をどのような分布類型として認定するかについて、必ずしも客観的な尺度が存在するわけではない。現時点では、読図者の主観に頼らざるを得ない。今回のような方法を引き続き継続して適用するには、地図のような空間情報を定量化して扱う方法の導入が将来的には不可欠になるはずだ。

ところが、現段階で示している方言地図というものは、実は離散情報の寄せ集めという性質を持つ。これ自体が悪いというわけではないが、定量化した扱いにはもっともなじみにくい性格のデータである。情報を個別化して扱っていくことが必要になるだろう。ただし、これは技術的なことなのでさほど困難なことではない。

もうひとつの課題は、分布進行速度の測定である。

前節でアスペクト成立時期の測定にふれた。ただし、段階的なアスペクトの分布領域が確認されても、拡散状況が理論と照合されるだけで、発生の「時期」までは測定されない。これを測定するためには、基本的な分布進行速度を知ることが必要だ。

分布進行速度については、徳川 (1993:pp.391-412; 1996) がよく知られるが、正面から取り上

げる後継的研究がなされていない。相当なデータ量を要し、力量が試されるだろうが、何らかの方法で状況を打開しなければ、この分野の発展は望めない。例えば、分野や項目の性質に応じた進行速度の法則性が存在するというようなことはないだろうか。困難であるが、おおいに開拓の余地を残す。

最後に残された課題は、データ量である。アспектに関して GAJ で扱うのはほんの3～4語に過ぎない。上記のように語彙的拡散をベースに考察を進めるには項目数が少なすぎる。伝統的方言全体が危機的な状況にあって、早期にデータを豊富にし、多くのアプローチを可能にすべく共有化することが必要である。

## 11. むすび

表現法を対象とした分布類型の設定とそれに基づく分布形成を追求することの意義を述べた。今回の発表はまだ、試行的段階であるが、日本語方言の形成をとらえるためのひとつのステップを示すことができたと考える。

もちろん、課題も多くある。特に空間データの科学的・定量的分析のためには、地理関係の分野で近年盛んに利用されてきている GIS (Geographical Information System) の手法の導入が求められる。時間・費用ともに現段階では要することであるが、あらたな展開が待っていることは間違いない。

その他、分布類型というものが、古くから知られる「区画論」とどのような関係にあるのかも興味深いところであるが、「区画」は、分布成立よりも方言空間の「認識」「認知」のようなことに関係するものかもしれない。

限界があるとは言え、日本には『日本言語地図』(LAJ)『方言文法全国地図』(GAJ)という豊富なデータ量のある方言地図が存在する。GAJは電算化したデータも公開しており、利用の便は高くなっている。編集者として多方面からの利用を期待するところである。

## 文献

- 井上文子 1998 日本語方言アспектの動態—存在型表現形式に焦点をあてて— 秋山書店  
大西拓一郎 1999 新しい方言と古い方言の全国分布 日本語学 18-13  
工藤真由美 2002 日本語の多様性へのまなざし—空間表現・時間表現・待遇性— 国語学会 2002 年度秋季大会予稿集  
小林隆 1991 方言東西対立分布成立パターンについての覚え書き 研究報告集(国立国語研究所)12  
真田信治 1992 関西方言の現在—変化の要因と過程— 日本語学 11-7  
徳川宗賢 1993 方言地理学の展開 ひつじ書房  
徳川宗賢 1996 語の地理的伝播速度 言語学林 1995-1996 三省堂  
彦坂佳宣 2002 東西方言の接点 朝倉日本語講座 10 方言 朝倉書店  
日高水穂 2002 方言の文法 朝倉日本語講座 10 方言 朝倉書店  
馬瀬良雄 1992 言語地理学研究 桜楓社